

展覧会カタログ批評の可能性

「知の共有財産、展覧会カタログの現在」シンポジウム報告



今橋 映子

全園紙のある語欄を拒
当していた時のことだ
新聞媒体ならば題性も兼
ねて考え、現在開催中の
展覧会カタログを紹介しよ
うとしたところ、待ったが
なかった。カタログは本
ではないか」というのが
その理由だ。その大部
分にISBN(国際標準図
書番号)が付かず、書店に
流通しない展覧会カタログ
は、書評見ても読者が買
えないので……と説明さ
れ、なるほどと思った
が、やはり納得がいかな
い。このも充実した展

覧会カタログは、図版の面
でも資料の面でも、それ
こそ山だからだ。しかも
値段は大体、千円前後と
（一般集を考れば）は
るかに安い。考えてみれば
欧米は一般的に、展覧会
カタログは全て図書として
流通し、ネット書店など
通じ、むしろ国内のもの
よりも簡単に手に入る。そ
れならなぜか、良質
な日本のカタログの存在を
いかに紹介することができ
ないだろうか。

学出版会(二〇〇三年)は、
三十人近い書き手によ
り(すでに雑誌『比較文学研
究』に連載した)本を各
「生きた」カタログの
「試み」である。美術史
ローでない私には、む
しろ学際、越境の時代だ
らこそ企画されたような
展覧会(たとえば「岡倉天
心とポスト・美術館」展、
「アジア系アメリカ人芸術
家」展など)を積極的に取
り上げた、異文化理解、近
代化と西欧、ことばとイメ
ジ……などのテーマは、

一人の巨匠の名を顕彰す
る従来の美術展とは異なっ
て、学際的な文化研究と美
術館との対話の場所が、そ
こに開かれていることを何
よりも示しているのだら
う。

本年(二〇〇三年)七月
五日、駒場キャンパスで開
かれたシンポジウムは、先
の共書の刊行を受け、展覧
会カタログの現在をめぐ
って、比較文学・比較文化、
美術史、美学、アート・ド
キメンテーションなどの
専門家のみなさん、美術館
現場の学芸員を含め文字通
りの「対話」を試みよう
と企画されたものである(比
較文学・比較文化研究室主
催。教養学部美術博物館お
よび日仏美術学会共催)。

当日は土曜日の午後で、
総計七時間に及ぶ異丁場
であったにも関わらず、実
に

三百名近い聴衆を得て、数
理研大講義室で立見が出る
盛況ぶりであったことは
この問題への関心の高さを
何よりも窺わせた。

シンポジウムは二部に分
かれ、第一部ではまず「制
作から収集まで」と題し
て、主に美術館関係の現場
の側から見たカタログの現
状と問題点が報告された。

「超域文化/仏語」



東京大学教養学部
発行人 風間勝昭
2003年10月8日

- 1面 展覧会カタログ批評の可能性(今橋映子)「迷
うカゲ」ボウワム 展覧会
2面 「劇の場と学問の場」『新訳ハレ
ト』をめぐって 河倉洋一
3面 「展覧会と書」山田昭 村田 彩の「書」
小林 兼夫
4面 「新編とは何か」現代学問における面
野野 野(時折) 藤野 野(時折) 知(知) 知(知)
5面 岡倉天心をめぐって 山崎 野(時折)
6面 『100年文明開化』展覧会
http://www.c.u-tokyo.ac.jp/gakushin/

冒頭で三浦篤氏(超域 助
教授)は、マネ展を例とし
て、十九世紀の作品目録
から始まったカタログ制作
が、一九八三年のフラン
ワーズ・カシャン編『マネ
没後百周年記念展』の見事
な一冊に要約された。

美術情報学の立場から、む
しろカタログが制作された
後、「本」ではないために
被る様々な問題点を、貴重
な新情報(共に指摘。ウェ
ップ上のカタログの将来性
について触れられた。第
部の最後で寺口淳治氏

力があがり、フロアとの質疑
応答では、カタログの置か
れている困難な状況はその
「カタログ批評の可能性」
と題し、私を含め、前掲共
書の書き手三人がカタログ
という存在そのものを上
に再検討した後、展示さ
れる「モノ」に付き物のオ
リンピックという観念をど
まで保持し切れるのか――

「カタログ批評の可能性」
と題し、私を含め、前掲共
書の書き手三人がカタログ
という存在そのものを上
に再検討した後、展示さ
れる「モノ」に付き物のオ
リンピックという観念をど
まで保持し切れるのか――

と題し、私を含め、前掲共
書の書き手三人がカタログ
という存在そのものを上
に再検討した後、展示さ
れる「モノ」に付き物のオ
リンピックという観念をど
まで保持し切れるのか――

と題し、私を含め、前掲共
書の書き手三人がカタログ
という存在そのものを上
に再検討した後、展示さ
れる「モノ」に付き物のオ
リンピックという観念をど
まで保持し切れるのか――



東大出版会
3200円

「カタログ批評の可能性」
と題し、私を含め、前掲共
書の書き手三人がカタログ
という存在そのものを上
に再検討した後、展示さ
れる「モノ」に付き物のオ
リンピックという観念をど
まで保持し切れるのか――

と題し、私を含め、前掲共
書の書き手三人がカタログ
という存在そのものを上
に再検討した後、展示さ
れる「モノ」に付き物のオ
リンピックという観念をど
まで保持し切れるのか――